

『失樂園』と *Genesis B* (Junius MS)⁽¹⁾

滝 沢 正 彦

1

通称 Junius MS と呼ばれる Anglo-Saxon 語の聖書の部分的な自由訳は、現在 Oxford 大学の Bodleian Library に 'Junius XI' と分類して所蔵されている。folio 版の羊皮紙116枚、最初の頁には絵が描かれており、途中挿絵用に空けてある頁を除き本文は229頁である。

明らかに異なると考えられる4人の筆跡が認められ、それぞれ pp. 1~212, pp. 213~15, pp. 216~28, p. 229 を担当している。全部で5020行に及び、ll. 1~2936 が *Genesis*, 次の590行が *Exodus*, 続いて764行が *Daniel*, そして最後に 'Christ and Satan' の730行が来る。最初の *Genesis* のうち、ll. 235~851 は、その文体・内容が著しく異なるため、慣例的に *Genesis B* と呼んで、その前後の *Genesis A* と区別している。本稿では、この *Genesis B* と、Milton の *Paradise Lost* の関係を考えてみたい。

Junius MS の執筆年代は明らかでないが、およそ1000年頃のものとして推定されている。⁽³⁾ ただし、*Genesis A* の成立を700年前後とする説も有力である。⁽⁴⁾ *Genesis B* について Sievers はその1875年の著書の中で、825年頃の作と考えられる O Saxon の『新約』の自由訳 *Heliand* との関係を示唆し（同一の著者、あるいは *Heliand* の著者の弟子の作か）、O Saxon からの翻訳であろうと推定した。その後、ローマ教皇庁の図書館から発見された O Saxon の断片（26行と1語）が、Junius MS の ll. 791~817 と対応することが判り、しかも逐語的に正確に訳されていることから、偶然の一致とは考えられないので、⁽⁵⁾ *Genesis B* の成立は9世紀以後であろうとされるようになった。

Junius MS は、1651年頃、James Ussher (or Usher), Archbishop of Armagh

(1581～[1625～56]) から Francis Junius (1589～1677) が譲り受けたものらしい。Ussher は、有名な *Book of Kells* (4福音書の8世紀頃のラテン語写本) を St Columba で発見するなど、古写本の収集家でもあったから、何処かで発見し、古ゲルマン語比較研究に関心のあった Junius に、これを譲ったのではないかと想像される。

Junius は、聖書学者でもあった Franciscus Junius (1545～1602) の息子で、オランダに生れ育ったが、1621年、Thomas Howard, Earl of Arundel の司書として来英、ゲルマン諸語の比較研究、とりわけ古英語の研究に従事していたようである。1651年に一度オランダに帰り、1674年に再び英国を訪れ、甥の Isaac Vossius と暮らしている。Junius は、おそらく帰国直前に入手した写本を、Cædmon のものと考え、1655 (あるいは1654) 年、アムステルダムで、*Cædmonis Monachi Paraphrasis Poetica Genesios.....*, Amstelodami, MDCLV と題して出版した。以後、著者を Cædmon と考える説が有力であったが、先の Sievers 以後、*Heliand* の著者との関係が話題になった。⁽⁶⁾しかし、今日では、語彙・文法・文体の全てに古サクソン語の影響が数多く見出し出されることから推して、古英語に未だ不慣れであったサクソン人による古英語訳ではないかと考えられている。⁽⁷⁾

Milton と、この古写本の関係についての直接の資料は現在まで発見されていない。著作中、*History of Britain* 中の *Battle of Brunanburh* への言及も曖昧で不正確なところから、一般には、Milton は OE が読めなかったと考えられている。⁽⁸⁾しかし、Milton の OE の能力は別にして、何らかの形でこの古写本の内容を知っていた可能性もまた否定できない。Masson は、一般的ではあるが、強い蓋然性を示唆している。⁽⁹⁾今日、より積極的に、Junius の助けを借りて Milton がこの古文書を調査した可能性も考えられている。⁽¹⁰⁾Parker は、Junius の甥 Isaac Vossius から、オランダの詩人 Daniel Heinsius (1581～1655) の息子 Nicolas (1620～81) に宛てた、1651年5月29日付 (大陸暦6月8日) の手紙の一節に 'I've learned more about Milton from my uncle [Francis] Junius who is on familiar terms with him' とあるのを紹介している。⁽¹¹⁾そして、1640年代に Milton が得た多くの知己、Margaret Hobson, Bridget Skinner, John Bradshaw 等とともに Francis Junius の名前も挙げている。⁽¹²⁾傍証は他にもあるが、とりわけ Smectymnus 論争で、Milton が *Of Reformation* (1641) で反論した相手が、Joseph Hall とともに、James Ussher であったことは、後者の司書であった Junius との関係想像させる。少なくとも、既に滞英20年の Junius にとって、Milton は気懸りな存在であったろうし、Junius 自身も、当時比較的知られた人物であったようだ。このことは、旅行家として知られていた Christopher Arnold

なる人物の1651年7月26日付の友人 (Georg Richter)宛の手紙の一節に、彼の逢った ‘various English celebrities’ の中に、Selden, Ussher, William Petty 等の名と並んで、Francis Junius の名前が挙げられていることからも推量⁽¹³⁾できる。Ussher については、Milton は、*Reason of Church Government* の中でも Lancelot Andrews と並べて攻撃しており、論争の相手ではあったが、それだけに一層、相手を意識せざるをえなかったのではないかと思われる。今一つの傍証は、Junius の甥 Isaac Vossius は、後に、スウェーデンの女王 Christiana の下で司書職を得るが、彼は、友人 Hensius と共に、同じく Christiana の下に身を寄せていた Salmasius を激しく非難し、そのことが原因で、一時 Christiana との関係が悪化している。この2人を、Salmasius は Milton の仲間と誤解していた疑いもある。Salmasius の死後、Isaac と Christiana の関係は元に戻るのだが、何れにしろ、Salmasius と Isaac Vossius を介して、後者の叔父 Junius と Milton が知りあっていただけとも不自然ではない。

現在までに知られている二人の関係についての事実は以上の通りである。ここから直ちに影響関係を論じることは困難であるが、以下に示すとおり、*Paradise Lost* と *Genesis B* との間に極めて近似した精神、雰囲気が存在するところから、仮りに Milton が *Genesis B* を読んでいなかったとしても、*Paradise Lost* に、従来考えられて来たものとは別種の光をあててみることはできるのではないか、と思われる。

2

Junius MS は、先ず神の栄光を讃美し、天使の驕り (oferhygd) による叛乱、地獄への追放が述べられ、次いで、光、天地、陸と海の創造が唱われる。一般には、その後3枚、おそらくは200行程度が散逸していると考えられ、Eve の創造に連なっている。幸福な楽園の様子の中で、更に一枚程度が欠けていて、急に禁断の実の話に移る。以上が *Genesis A* である。

突然、再び、神による天使創造の物語になる所からが、一般に *Genesis B* と考えられている。

先ず、神は天使に知性 (gewit) を与え (l. 250)、内、一人を、とりわけ強く、輝やくものに作る。しかし、彼はそれを悪用し、神に敵対し (ll. 259—60)、神の前にへつらうことを拒否し、自らも神であろうとする (Ic mæg wesan god swa he.)⁽¹⁴⁾ (l. 283)。これを聞いて神は怒り、彼とその徒党を地獄に追放し、地獄で墮落天使達はことごとく devils になる (Par he to deofle wearð, se feond mid his geferum eallum) (ll. 305—6)。

Lagon þa oðre fynd þam fyre, þa ær swa feala hafdon
 gewinnes wið heora waldend. Wite poliað,
 hatne heaðowelm helle tomiddes,
 brand ond brade ligas, swilce eac þa biteran recas,
 prosm ond þystro, forþon hie þegnscipe
 godes forgymdon.

[Lay the other fiends in the fire, who before so many made
 of battles against God. *They* torture suffered,
 hot battle-surge hell *right*-in,
 fire and broad flames, such also the bitter smokes,
 fume and darkness, because they *feudal*-duty
 to God neglected.]⁽¹⁵⁾

(ll. 322—27)

驕り (ofermetto) と野心 (hyge) から神に反抗した墮落天使の長が地獄の業火に苦しめられる様子が、繰り返し述べられる。

(hie) purh ofermetto sohten oþer land,
 þæt was leohtes leas ond wæs liges full.
 [(they) through pride sought other land,
 which was destitute of light and was full of flame]

(ll. 332—33)

Weol him oninnan
 hyge ymb his heortan, hæþ was him utan
 wraðlic wite.

[Welled within him
 ambition about his heart, outside of him was hot
 severe punishment.]

(ll. 353—55)

この *Genesis B* の冒頭と、ミルトンの『失楽園』⁽¹⁶⁾ の始まり、特に第一巻の内容とは、偶然とは考え難い程、よく似ている。何よりも、全体の調子の類似に驚かされるが、

語句の上での対応を指摘することさえ困難ではない。先ず、地獄に仲間と共に横たわる様子、地獄の描写が注目される。

he with his horrid crew
Lay vanquished, rolling in the fiery gulf
Confounded though immortal :

(i 51—53)

A dungeon horrible, on all sides round
As one great furnace flamed, yet from those flames
No light, but rather darkness visible
Served only to discover sights of woe,

(i 61—64)

PLでは、天使の不死性 (immortality) が強調されているが、これを除けば、対応はほとんど逐語的と言ってよい。‘Lay.....in the fiery gulf’ は、主語を変えてはいるが ‘Lagon.....on pam fyre’ に対応するし、‘No light’ ‘As one great furnace flamed’ は ‘wæs leohtes leas’ ‘wæs liges full’ にそれぞれ対応する。あるいは ‘prosm ond pystro’ が前者に、‘brand ond brade ligas’ が後者の素朴な形と考えることもできる。「驕り」「野心」に対しては、PLの ‘ambition’ ‘pride’ が対応する。

and with *ambitious* aim
Against the throne and monarchy of God
Raised impious war in heaven and battle proud
With vain attempt.

(i 41—44) [イタリックスは引用者]

上の引用のll. 42—43の ‘Against the throne...../ Raised impious war’ は、*Genesis B*の ll. 259—60の ‘ongan him winn uphebban / wið pone hehstan heofones Waldend’ [began himself to raise war / against the highest heaven’s Ruler]の、ほとんど翻訳と言っても良いほどである。勿論、これ等の概念や筋書は、原罪による墮落 (Fall) と Satan を巡る過去のキリスト信仰の文化史の中で形成されて来たものであって、その考え方において、Milton と *Genesis B* の著者に限定されるものではない。しかし、注目すべきことは、考え方一般ではなく、対応する用語法と、その

利用されている状況設定である。たとえば ‘uphebban’ (→Mod G. *aufheben*) は、第一義的には ‘lift, raise’ 以外に訳しようの困難な語であり、winn (=war) との結合では、‘raise’ にならざるを得ない。その、ならざるを得ない語結合の間に ‘impious’ を挿入して、文体を Miltonic にしていることに、返って、影響関係が推量されないだろうか。なお、‘raised war’ では、‘raised’ が二音節になるのを、‘impious’ を挿入することにより、‘ráis’d impíous wár’ のリズムが完成する。⁽¹⁷⁾

さて、Satan は、地獄にあって、神への復讐を誓うが、その手段として、神の創造した宇宙、とりわけ、地球の上で神が最も愛する人間を墮落させることを選ぶことになるが、その論理も、二作において、きわめて類似している。もちろん、*PL* においては、最終的に Satan がその方法を採用するまでには、地獄における大討論を経るのに対して、*Genesis B* では直線的にこの結論に達している点で、両者の迫力には大きな差がある。後者では、突然、しかも、それがきわめて自然な結論であるかのように人間誘惑の主題が登場する。若し、この作品から Milton が *PL* を構想したとすれば、この唐突さを克服するために、主戦論、反戦論、敗北主義、急襲論、計略論等を登場させて議論し、その論争の結果から、誘惑の主題を引き出そうとした、と考えられるだろう。この論争を通して、地獄の雰囲気を形象化することにもなった。おそらく古サクソン民族の共同体の中にあった共通の地獄の表象、キリスト信仰によって屈折させられる以前の間人主義、人間の価値に対する無前提の肯定、これ等を、Milton は、17世紀英国において、あらためて、その詩的創造力によって説得的に提示しなければならなかった、と考えることができる。

敗北した墮落天使群を再び立ち上げようとする *PL* の Satan の言葉、

What though the field be lost ?

All is not lost : the unconquerable will,

And study of revenge, immortal hate,

And courage never to submit or yield :

(i 105—08)

これは、一般には、Tasso の ‘We lost the field, yet lost we not our heart’⁽¹⁸⁾ の敷衍であるとされているが、Tasso のように観念的ではない。少なくとも、後半、will, revenge, hate, never to submit or yield と畳み掛けてくるところは、*Genesis B* の、‘Ne magon wepæas wrac gefremman,/ geleanian him mid laðes wihte..... ? [Can

we not make revenge against that, / repay him with any of harm..... ?](ll. 393—94) を彷彿とさせないであろうか。

Genesis B は、宇宙と人類の創造の報せと、人類誘惑の計略は次のように述べられている。

He hæfð nu gemearcod anne middangeard, þær he hafð mon geworhtne
 æfter his onlicnesse. Mid þam he wile eft gesettan
 heofona rice mid hluttrum saulum. We þas sculon hycgan georne.
 [He has now one middle-world designed, where he has made man
 After his likeness. With that he will set again
 heavens' kingdom with pure souls. We must think of this eagerly.]
 (ll. 395—97)

この考察は、ただちに、Adam と Eve の誘惑へと結論づけられる。

Gif hie brecað his gebodscipe, onne he him abolgen wurðeþ ;
 siððan bið him se wela onwended and wyrð him wite gearwod,
 sum heard hearmscearu. Hycgað his ealle,
 hu ge hi beswicen ! Siððan ic me sefte mæg
 restan on pyssum racantum, gif him þat rice losað.
 [If they break His command, then he *will* be enraged by them ;
 because the prosperity *will* be taken-away from them and punishment *will*
 be prepared,
 some hard affliction. Think of it all-of-you,
 how you *could* seduce them ! Then I can myself comfortably
 rest in these chains, if the kingdom *may* lose them.]
 (ll. 430—34)

一つには、かつて栄光の位にあった自分が地獄に苦しみ、土から作られた人間が、その栄光を手に入れることに対する嫉妬と憤怒からこの計画が立てられた。

Þæt me is sorga mæst,

pat Adam sceal, þe wæs of eorðan geworht,
 minne stronglican stol behealdan,
 wesan him on wynne, and we þis wihte polian,
 hearm on þisse hell.

[It is *to me of* greatest sorrows,
 that Adam shall, who was made of earth,
 my mightiest throne possess,
 be himself in pleasure, we *must* suffer this punishment,
 affliction in this hell.]

(ll. 364—68)

だが、それ以上に、人間を墮落させることそれ自体が直接の目的になっていることが注目される。たとえば、*Genesis B* の冒頭で述べられていた、正統的キリスト信仰教義に由来する *hyge, ofermetto* は次第に影を薄め、セイタン対人間の主題がこれに取って代り、さらには、叛乱の事実を忘れたかのように、自分を地獄に落すことを、神の誤りとし、進んで自分の無実を訴えようとさえする。

Næfð he peah riht gedon
 pæt he us hæfð befællad fyre to botme,
 helle pære hatan, heofonrice benumen ;

[He had-not however done right
 that he had thrown-down us *in* fire to bottom,
 to hell the hot, deprived *us of* heaven :]

(ll. 360—62)

swa he us ne mæg æniges synne gestalan,
 pat we him on þam lande lað gefremedon, he hæfð us peah þæs leohtes
 bescyrde,
 beworpen on ealra wita mæste.

[although he cannot accuse us *of* any sins,
 that we made harm *to* him in the land, he however had deprived us *of* the
 light,

cast-down in *the* heaviest of all punishments.]

(ll. 391—93)

神の行為を ‘ne...riht’ とし、自らの行為を ‘ne..ænige synne’ とすることを、墮落し、地獄にあって、なお自己の罪を認めぬ Satan の驕り、心のかたくなさの表現と考えることは、もちろん可能ではあろう。⁽¹⁹⁾しかし、詩の流れは、全体として、Satan の怒りを増幅させるように進んで行く。この怒りの拡大が、対象である人間との緊張関係に読者（聴者？）の注意を集中させて行く効果をあげていることも否定できない。そもそも、OE では、hyge [pride, courage] はもちろん、ofermetto (332), ofermod (272)[pride, overconfidence] 等も、大きな罪とは考えられていなかったようである。前者は、多くの場合美德であったし、⁽²⁰⁾後者も、せいぜい自業自得の原因程度であって、特に、前者については、本詩の中でも、その反義語 hygeleast [want of *hyge*](ll. 331) が墮落の原因とされているほどである。こうして、詩は、そのヘブライ民族の伝説を素材としながらも、それを具体的に描写し、その物語の展開の牽引力となっている論理、その前提する価値観・世界観は、古ゲルマン民族の異教時代のものである。仮りにこれをゲルマン的武勇観と名付けるならば、しばしば指摘されるミルトンの描く Satan の魅力も、⁽²²⁾おそらくはこのゲルマン的武勇観と無縁ではなかったろう。わけでも、H. J. C. Grierson をして、「シェイクスピアにもこれ以上偉大な瞬間があるだろうか」⁽²³⁾と言わせしめた、あの Satan が涙を流す場面、

Thrice he essayed, and thrice in spite of scorn,

Tears such as angels weep, burst forth :

(i 619—20)

ここは、*Beowulf* や *The Battle of Maldon* に登場する古ゲルマン民族の族長・指導者を彷彿とさせないだろうか。我々は、悪の化身としての Satan ではなく、仮りに敵として立ち現われているにしても、武勇を備えた一人の「人間」を見ていることに気付くのである。

もちろん、17世紀の、しかも革命に主体的に参加したミルトンにとって、異教時代の人間像を、そのまま描くことはできなかった。*PL* が *Genesis B* と微妙なずれを示しはじめるのは、おそらくそのせいであろう。地球と人間の創造に関しては、*PL* の中で Satan は次のように唱う。

There is a place
another world, the happy seat
 Of some new race called Man, about this time
 To be created like to us, but favoured more.....
 Thither let us bend all our thoughts,

(ii 345—54)

最後の一行は、先に引用した *Genesis B* の 'We pæs sculon hycgan georne' の、ほとんど正確な現代語訳と言ってもよい。PL の 'world', 'Man...To be created' は、それぞれ 'middangeard', 'he hafð mon geworhtne' と、それぞれ対応する。'æfter his onlicnesse' が 'like to us' (イタリックスは引用者) となっていることに現代の読者は驚くが、Satan といえども天使であることの、誇りの表現であろう。問題はこの後にある。

Seduce them to our party, that their God
 May prove their foe, and with repenting hand
 Abolish his own works.

.....

Advise if this be worth
 Attempting, or to sit in darkness here
 Hatching vain empires.

(ii 368—78)

'Seduce them' は '(Hycgað)hu ge hi beswicen' の訳であり、'their God.....their foe' が 'he him abolgen wurðep' の言い換えであったとしても、決定的な相違は、人間の幸福 (wela) が奪われ、人間に罰 (wite) が加えられることに関心を向けている *Genesis B* に対して、PL では、人間の墮落によって、神に対する復讐が成立することにもっぱらその関心が向けられている点である。PL の後半では、人間の責任の問題が、たしかに重大な主題として取り上げられ、この問題を中心にこの叙事詩は展開して行く。しかし、それにもかかわらず、PL の中で、人間は Satan と神との抗争の大きな枠組の中に確実に取り込まれており、Satan による神への復讐の、その手段にされている。これに対して、*Genesis B* の Satan の目的は、あくまでも人間の墮落そ

As in a cloudy chair ascending rides
Audacious,

(ii 884—931)

*Genesis B*の簡潔な表現に較べ、ここでミルトンは、はるかに饒舌であり、混沌の宇宙の描写に豊かな想像力の筆を揮う。それでも、地獄の門 (helldora ; gates), 翼の飛翔 (swang pæt fyr on twa ; his sail-broad vans / He spreads) 等、二作の間に可能な関係を読みとることはできる。

しかし、最大の違いは、人類誘惑に旅立つのが、*PL*では Satan 自身であるのに対して、*OE* 詩では 'godes andsaca [God's adversary]' と呼ばれる Satan の配下の一人であることである。*PL*は、以後、完全に *Genesis B*とは別の道を辿る。後者に従えば、'godes andsaca' は、神よりの使いであると名乗り、それを信じない Adam を咎め、若し Eve が禁断とされる木の実を食べれば、Adam の不服従をよろしく神にとりなすと伝える。Eve は Adam を神の怒りから守るためこれを食べ、続けて Adam をも説得してこれを食べさせる。'godes andsaca' の勝利宣言の後、二人は原罪に気付く、自らの裸体を恥じ、森に逃れて木の葉で身を被い、神に祈りを捧げるところで *Genesis B*は終わっている。以下、この *OE* の *Genesis* は、神が Paradise に散歩に来て、二人の原罪を知り、楽園から追放、Cain と Abel の誕生へと物語を進めていく。

誘惑の場面にも、興味深い場面がないわけではない。たとえば、*PL*では、Adam は Eve への愛の故に罪を犯すのに対して、*Genesis B*では、Eveの方が、Adam を救おうとして罪を犯す。また、*PL*の 'Fall' が意識的であるのに対して、*Genesis B*の方では、Adam と Eve は完全に騙されて木の実を食べる。ここには、人間主義・人間への信頼という共通の立場ながら、その信頼の仕方において、決定的な相違がある。*Genesis B*の Eve の愛の中に、夫のために生涯をかけるクリエムヒルトの原型を見ることができし、*PL*の 'Fall' の中では、自らに規律を課す孤独にして独立した精神（規律ある自立）の誕生、紛れもない近代的自我の成立を、我々は見ることができ。

4

本稿において、ミルトンが *PL* 創作において、*Genesis B* から決定的影響を受けたことを、文献学的に論証し得た、とは考えていない。この二つの関係を巡って、かつて Todd から Woodull 頃までに寄せられた興味は、今日の厳密な影響関係立証の手

続を前にして、大胆に表明し難くなっている。しかし、関心が完全に失なわれたわけではない。むしろ、確実な資料に基づいて言い得る限りの事実として、ミルトンと Junius⁽²⁶⁾の文献学上の関係や、PLと Genesis Bは共通のラテン語文献に基づいていた可能性⁽²⁷⁾などが指摘されるのは、依然として関心が研究者の中に連続していることを示している。しかし、論証の精密さが今後ますます要請されるとすれば、未発見の資料が発掘されない限り、両者の直接の影響関係が立証される可能性は小さい。おそらく、一部のミルトン好事家の興味としてあため続けられるに止まるかもしれない。

むしろ、我々は、両者に共通する感受性の方に着目すべきではなかろうか。これまでしばしば強調され、多くの蓄積も残している、ミルトンを育て上げた土壌の研究、誤解を恐れず要約すれば、ヘブライ=キリスト信仰の文化と、ラテン=古典古代の文化の二つの文化、この二つに、今一つ、古ゲルマン的文化を加えることができるとすれば、⁽²⁸⁾ミルトン研究に新しい地平が拓かれうるのではないかと思う。そして、若しそれが部分的にも可能であるならば、Genesis Bと PLの関係や、本稿では触れなかったが、Paradise Regainedと 'Christ and Satan'の比較から引き出し得る事柄が、英国ルネサンス、ひいては西欧近代文化の研究を見直す一つの手懸りになるのではないかと考えられる。

注

1. 本稿は、1984年7月7日、日本ミルトン・センターの定例談話会で報告したものを中心に、書き加えたものである。
2. ただし、Sieversは、ll. 852~2936を第三の人物の手になる可能性を考え、これを Genesis Cと名付けている。Eduard Sievers, "Cædmon und Genesis", *Britannica, Max Förster zum 60. Geburtstag*, Leipzig, 1929, pp. 57—84.
3. Israel Gollancz, *The Cædmon Manuscript of Anglo-Saxon Biblical Poetry, Junius XI in the Bodleian Library*, Oxford, 1927, p. xviii.
4. Gregor Sarrazin, "Das Beowulflied und die ältere Genesis", *Englische Studien*, xxxviii (1907), 170—195. Klaeberも同意見のようである。Cf. *English Studien*, xlii (1911), 321—38.
5. Karl Zangemeister & Wilhelm Braune, *Bruchstücke der altsächsischen Bibeldichtung aus der Bibliotheca Palatina*, Heidelberg, 1894.
6. Sievers, *Der Heliand und die angelsächsische Genesis*, Halle, 1875.
7. B. J. Timmer, *The Later Genesis*, Oxford, 1948; 2nd ed. [with additions and corrections], 1954.
8. たとえば James Holly Hanford & James Taaffe, *A Milton Handbook*, 5th ed.

- [renewed by Hanford], 1970, p. 209.
9. Masson, *Life*, vol. 6, p. 557.
 10. John J. Roberts, 'Franciscus Junius', *A Milton Encyclopedia*, vol. 4, p. 275.
 11. *A Biography*, vol. 2, p. 986; cf. French, *Life Records*, vol. 3, pp. 33, 57~59, 59~60.
 12. *op. cit.*, vol. 1, p. 251.
 13. *ibid.*, p. 389.
 14. 以下の *Genesis B* からの引用は, George Philip Krapp ed., *The Junius Manuscript* (The Anglo-Saxon Poetic Record), New York, Columbia UP., 1931 による。
 15. 以下の現代英語訳は引用者が便宜的に作った仮訳である。出来る限りの逐語訳のため、訳語や語順は不適切であるが、推量可能な限り、一語一語対応するように心懸けた。イタリックスは、本文に現れない前置詞・代名詞等を補うとき、また、tomiddes→*right-in* や pegnsceipe→*fudal-duty* のように、現代英語では一語で表現し難いときには、二語またはそれ以上の語でおおよその意味を表現するためにハイフンを、それぞれ利用した。
 16. John Milton, *Paradise Lost*. 以下 *PL* と略す。引用は John Carey & Alastair Fowler eds., *The Poems of John Milton*, Longmans, London & Harlow, 1968 から Fowler の編集した *PL* に従う。
 17. H. J. Todd をはじめ、現代のテキストでは、Visiak (The Nonesuch Library) や Merritt Y. Hughes (The Odyssey Press) 等も '*rais'd* impious war' (イタリックスは引用者) と編集している。勿論、今日の英音のように [impíəs] (米音では今日も [impáias]) とすることも可能で (cf. v 813), その場合は、この語を入れる必然性はなく、'*raised*' は二音節になろう。
 18. *Gerusalemme liberata* iv 15, tr. by Fairfax, 1600.
 19. この部分を Gregory (the Great), *Moralia in Job* の影響とする、Dando と Hill の興味深い説に従えば、そう説明されている。cf. Marcel Dando, 'The *Moralia in Job* of Gregory the Great as a Source for the Old Saxon *Genesis B*', *Classica et Medievalia*, xxx (1969), 420—39; Thomas D. Hill, 'Satan's Injured Innocence in *Genesis B*, 360—2, 390—2: A Gregorian Source', *English Studies*, XLV, n. 4 (1984), 289—90.
 20. たとえば, *The Battle of Maldon*, l. 4.
 21. cf. *ibid.*, l. 89.
 22. 「誤読」とされる場合もあるが、比較的最近では、D. J. Enright が、再び大胆に、*PL* の中で最も魅力のある登場人物として Satan を取り上げている。'Introduction' to *A Choice of Milton's Verse*, 1975.
 23. *Milton and Wordsworth*, 1937, p. 107.
 24. Henry J. Todd, *Some Account of the Life and Writings of John Milton*, 1809, pp. li ff.

25. Marianna Woodull, *The Epic of 'Paradise Lost'*, 1907, pp. 134 ff.
26. C. A. Patrides, *Milton and the Christian Tradition*, 1966, p. 21.
27. J. M. Evans, *'Paradise Lost' and the Genesis Tradition*, 1968, pp. 141, 144 ff.
28. まったく別のところから、私はかつてこのことに興味を抱いていた。拙稿「ミルトンにおけるゲルマン的愛の系譜」(平井正穂編『ミルトンとその時代』1974年、所収、pp. 217—48) 参照。